

よこすか海洋シンポジウム2019（第22回）

10月5日(土)よこすか市民会議が主催するフォーラム「横須賀と鯨 もっと鯨を知ろう！」に協賛しました。

前段では、日本捕鯨協会会長の山村和夫さんが日本近海は鯨の回遊路に当たっており、多種類の鯨が生息している環境が日本人の食文化を育む要因となったことなど「日本人の生活と鯨」について幅広く話されました。

後段は郷土史家の山本詔一さんが、開国以前から外国の捕鯨船が日本付近を航行しており、当時から浦賀に寄港して補給していたことなど横須賀と鯨の関わりなどについて詳しく話されました。

その後、記念艦「三笠」の紹介ビデオ「語り継ぐ想い」をご覧いただき、最後には、抽選で100名の方に鯨の缶詰が配られました。

よこすか海洋シンポジウム 2019 (第 22 回)

テーマ：「横須賀と鯨 もっと鯨を知ろう！！」

第1部「近代日本と鯨」 講師 山本詔一さん（横須賀開国史研究会会長 郷土史家）

1845年に、マンハッタン号（アメリカの捕鯨船）が、捕鯨船中に日本人捕鯨者22名を救助し、彼等を送り返し浦賀補給を行うために浦賀に来航しました。1853年には、アメリカのペリー司令官が率いる4艘の艦隊が浦賀湾に来航し、開港を求めましたが、その大きな目的の一つは、太平洋で操業していたアメリカの捕鯨船の補給地として使える港を確保することでした。幕末の捕鯨船から開港を経て近代化を進めた日本と鯨の関わりをお話していきます。



ハワイで最大のマッコウクジラの潮吹き



マンハッタン号の模型（浦賀 郷土資料館）

第2部「日本の生活と鯨」 講師 山村和夫さん（日本捕鯨協会会長）

我が国周辺海域は、海外からジャパン・グラウンドと称された鯨資源の宝庫で、日本では古来より鯨を食用に利用、戦後の食糧増強には通商手配もあって消費が全盛期を過ぎました。大津漁業の補給地であった横須賀は、昭和時代における缶詰式捕鯨の盛衰を目の当たりにしました。その鯨の特性と食文化について解説していきます。



網捕式捕鯨の様子（約200年前）



第三日新丸（長浦港）

